

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 7 号

2014年3月

同 朋 大 学

はしがき

この要旨集は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）8条の規定による公表を目的として2013年度に本学において博士の学位を授与した者の「論文内容の要旨及び、論文審査の結果の要旨」を収録したものである。

学位記番号に記した学位規則第3条第1項（いわゆる課程博士）によるものである。

| 学位記番号 | 学位の種類 | 氏名 | 学位論文の題目 |
|-----------|--------|-------|------------------|
| 文博甲第 11 号 | 博士（文学） | 棚橋めぐみ | 「王舎城の悲劇」にみる真宗救済論 |

| | | | |
|---------|------------------|--------|-------------|
| 氏名(本籍地) | 棚橋めぐみ(岐阜県) | | |
| 学位の種類 | 博士(文学)〔同朋大学〕 | | |
| 学位記番号 | 文博甲第11号 | | |
| 学位授与月日 | 平成26年3月24日 | | |
| 学位授与の要件 | 同朋大学学位規定第3条第1項該当 | | |
| 学位論文の題目 | 「王舎城の悲劇」にみる真宗救済論 | | |
| 論文審査委員 | 主査 | 本学特任教授 | 博士(文学) 尾畑文正 |
| | 副査 | 本学教授 | 博士(文学) 田代俊孝 |
| | 副査 | 本学教授 | 博士(文学) 中村 薫 |
| | 副査 | 大谷大学教授 | 博士(文学) 織田頭祐 |

13-8704 棚橋めぐみ

王舎城の悲劇にみる真宗救済論

内容の要旨

(構成)

序 章

第一章 『涅槃経』の救済論理

第一節 『涅槃経』の思想史的考証

第一項 『涅槃経』の翻訳と浄土教

第二項 仏性の思想背景

第三項 如来常住

第四項 唯除一闍提

第五項 一闍提思想の変遷

第二章 『観無量寿経』の念仏往生

第一節 『観無量寿経』の思想的変遷

第一項 『観無量寿経』の概略

第二項 浄影寺慧遠による『観経』序分義了解

第三項 嘉祥寺吉蔵の『観経』序分義了解

第二節 善導独明仏正意

第一項 善導の『観経』序分義了解

第二項 諸師の観法観と善導の観法観

第三項 諸師の九品観と善導の九品観

第三章 真宗における救済論の具体性

第一節 「王舎城の悲劇」の登場人物の救い

第一項 唯除の救い - 阿闍世の救いの過程から -

第二項 如来の本願力と凡夫の往生 - 韋提希の念仏往生の過程から -

第二節 人間業を超える救い

結 章

(内容)

序章

親鸞の教説が二十一世紀の現代に至るまで伝えられてきた背景をたどり、今日まで研究されてきた親鸞における仏教理解と、親鸞自身の生きてこられた足跡に留意した上で、現代日本を生きる私達が、いかにして宗教的救いと出遇うのかという問題を提起した。

その問題について、親鸞は他力によって罪悪深重、煩惱具足の凡夫が信心を獲得し、救われるという革新的な宗教的視座の具体性を、「王舎城の悲劇」の説かれた『涅槃経』や『観無量寿経』から学び、自らも愚禿の凡夫の身として念仏に生き、念仏に救われ、その行実を『教行信証』に遺している。

したがって、「王舎城の悲劇」の説かれた『涅槃経』や『観無量寿経』の経文を中心のテキストとし、人間社会における加害者、被害者、強者、弱者という立場を超えて人間が救われるという、宗教的救済の構造を明らかにし、罪悪深重、煩惱具足の凡夫の宗教的救済が、具体的に超高度文明ともいえる今日に生きる我々にとって、どのような意義があるのかという考察目的を提示している。

第一章 『涅槃経』の救済論理

『涅槃経』の主題である如来常住、一切衆生悉有仏性、そして一闍提成仏の説は、のちに仏教思想として成立してくる浄土教にも多大な影響を及ぼす経典でもある。

『涅槃経』は、原始仏教聖典といわれる「阿含部経典」の一部に含まれる『遊行経』を中心とした『小乗涅槃経』から始まり、紀元三世紀から四世紀あたりに成立した、曇無讖訳の四十巻の『大乘涅槃経』では条件付きで一闍提成仏が説かれるようになり、以後、慧嚴、慧観、謝靈運らの改修した、三十六巻本の『大乘涅槃経』では、一闍提成仏が説かれるまでになった。

また、浄土経典の方では、『大乘涅槃経』の四十巻本伝訳以後、『仏説阿弥陀経』や『仏説観無量寿経』のごとき諸経が相次いで現れ、天親による『浄土論』も中国に伝播された。こうした理由によって浄土往生の信仰は古くからそれ自体の中で発展をとげつつ、また『大乘涅槃経』がもたらされたことにより、その研究が興隆するに伴って、仏性思想や一闍提思想、末法思想などの諸問題を通して浄土教も『大乘涅槃経』の影響をうけることになったのである。

『大乘涅槃経』は、無信の者を断善根、すなわち一闍提と名づけ、闍提不成仏を強調して、信の有無が仏道にとっての死活を制する鍵であることを説いた。その上で、さらに『大乘涅槃経』は、そのようなもつとも度し難い一闍提をも見捨てないのが如来の行であると

説くのである。

『大般涅槃經』が釈尊入滅前後から、小乗、大乘の仏教思想をへて、最終的に浄土教にまで影響を与えた壮大な思想体系であるということを考察している。

第二章 『観無量寿経』の念仏往生

『観無量寿経』が翻訳されて間もなく、曇鸞（四七六一五四二）は、菩提流支三蔵の勧めによって『観無量寿経』を拝読し、浄土教に帰入したと伝えられている。その時に影響があったのは天親の『無量寿経優婆提舍願生偈』であったかもしれないが、曇鸞の名著『浄土論註』の随所に『観無量寿経』の引用がされている。特に、上巻終わりの「八番問答」には、『無量寿経』第十八願文と、『観無量寿経』の下品下生の文を対応させて罪業の凡夫が念仏往生していく有様を詳しく教示しているのである。

『観無量寿経』を禅観を表現した経典と言うよりも、浄土経典として注目し、殊に下品の悪人が十念の念仏によって救われていくという点を強調した第一人者が曇鸞である。この視点が、やがて次の道綽、善導に受け継がれて、日本の祖師たちにつたわり、やがて親鸞の仏教思想にまで影響を与えるのである。

仏教には、自力をもってさとりを完成しようとする聖道門と、阿弥陀仏の御名を称え、本願他力に乗じて浄土に往生してさとりを開く浄土門とがあるが、釈尊の在世の時代から遥かに時代を経た末法の時代に生きる煩悩具足の凡夫にとっては、聖道門のさとりの道としては機能なくなっているから、往生浄土の一門に記入せよというのである。

善導の少し前、唐代の高僧の浄影寺慧遠（五二三一五九二）は、『観無量寿経義疏』二卷（以下、をあらわし、三論宗を大成した嘉祥寺吉蔵（五四九一六二三）も『観無量寿経義疏』一卷をあらわし、それぞれ『観無量寿経』を註釈していたのである。

しかし、その内容は、『観無量寿経』は、心を静めて目のあたりに仏を拝見することで、罪障を消滅して浄土に往生する「観仏」の修業を説いたものであり、賢善精進の教えであるとの見方を示すものであった。しかも、凡夫が往生するような極楽浄土は、応土という浄土の中では最も程度の低いものであり、凡夫はそこでさらに修業を積んで煩悩を浄化し、さとりの完成に向かっていくというものであった。

一方、浄土門を勧める道綽に師事し、浄土教を学んだのが善導（六一三一六一八）である。善導は、道綽の教説をさらに深化させるだけでなく、先に述べた、慧遠、吉蔵の『観無量寿経』に対する領解のあやまちを正し、撰論宗の念仏別時意を論破するため、『観無量寿経疏』四巻を著した。

みずから古今の『観無量寿経』に対する了解を再検討し、『観無量寿経』領解の基本的な枠組みを定める為に、『観経疏』を著したと述べている。すなわち、善導は韋提希を凡夫と観ることで、阿弥陀仏の本願念仏の真髓を顕彰したのである。

以上のことから、『観無量寿経』の思想を唐代の諸師（慧遠・吉蔵・善導）に尋ねながら、善導によって明らかにされた念仏往生の教えによる韋提希の救いの真意を考究している。

第三章 真宗における救済論の具体性

第一章において、『大般涅槃経』の思想的変遷を考察したが、『大般涅槃経』ははじめ小乗仏教において発展し、煩惱を滅し、涅槃を得る経典、いわゆる『小乗涅槃経』として展開されており、一闡提の成仏は説かれていなかった。

しかしながら、永い年月を経て、大乘仏教が発展していくに伴い、一切衆生悉有仏性、一闡提成仏が展開されるようになり、『大乘涅槃経』の四十巻本伝訳以後、『仏説阿弥陀経』や『仏説観無量寿経』のごとき諸経が相次いで現れ、天親による『浄土論』も中国に伝播されたこともあいまって、浄土往生の信仰は古くからそれ自体の中で発展をとげつつも、『大般涅槃経』がもたらされたことにより、その研究が興隆するに伴って、仏性思想や一闡提思想、末法思想などの諸問題を通して浄土教も『大般涅槃経』の影響をうけることになる。

浄土教の説く、「浄土」という仏の世界を実現させるためには、清浄にして修善の力ある者よりも、まず最も穢悪不善にして力なき者を漏らすことなく摂取する不思議の力と願を持たねばならない。衆生救済の本願を信じ、念仏申せば仏国浄土への往生が説かれていても、世俗的な立場からすれば、それは最も信じ難いところでもある。

したがって、如来の本願力と、衆生の信の問題は仏教一般にとっても重大な課題である。その課題の究明の為に、中国の浄土教の祖師たちは、それを『浄土三部経』以外に、『大般涅槃経』に見出したのである。

その最も信じ難い、如来の本願力による、衆生の信心獲得による往生を具体的にあらわす物語として「梵行品」に「王舎城の悲劇」が説かれているのである。

中でも阿闍世は五逆罪の罪を犯した一闡提の極悪人である。その一闡提阿闍世が仏によって救われるという姿には、わが身の罪に苦悩する衆生と、苦悩を通して救いを求める凡夫の姿、そしてその凡夫を救済しようとする如来の慈悲心によって、罪悪深重、煩惱具足の凡夫に信心が開かれ、凡夫が凡夫のまま救われていくということが、実相を以って人類に明らかになったのである。

また、韋提希の念仏往生について、慧遠や天台教学では、『観無量寿経』の下品下生を説く教えには、「五逆」の衆生も往生し得るとすることをめぐり、「謗法」の不得往生の問題も含めて論議されていた。それらの諸師の解釈は、『無量寿経』において除かれる「五逆」の衆生が、『観無量寿経』においては往生し得ると説かれる理由を、種として『観無量寿経』の定善を中心にした観法の力によるというものである。したがって、「謗法」の衆生には『無量寿経』も『観無量寿経』も不得往生と説かれるということに、指して疑問を持たなかったのである。

しかし、善導においては、善導は五逆と共に、謗法の衆生についても、往生は可能であると主張するのである。その根拠として、善導は『無量寿経』や『観無量寿経』の中に、無限の如来の大慈悲心を汲み取っていたのである。罪悪深重、煩惱具足の凡夫が、たとえ「謗法」の罪を背負っていたとしても、広大無限な慈悲心を持った如来は、衆生を見捨て

るはずがないというのである。

また、善導は韋提希は高貴な王妃であり、賢夫人である誉れ高き女性である一方で、息子を産み落とす時に殺そうとした自身の罪に鈍感であり、逆害を機に愚痴を吐露する人間でもあったとしている。

韋提希を実際に業を持った凡夫、すなわち「実業の凡夫」という理解に立って、韋提希こそ本当に苦悩する人間が、念仏によって往生する具体相として善導は考えていたのである。

『涅槃経』、『観無量寿経』が思想的変遷を経て、親鸞にまで伝わった時、親鸞は、阿闍世の獲信と韋提希念仏往生の姿に、如来の願心によって、罪悪深重煩惱具足の凡夫が救われていくという、人間業を超える宗教的救済の具体相を見出した。如来の願心と衆生の信心獲得による念仏往生による凡夫の救いの構造を「横超」という革新的な宗教論理で他力の仏道を表現したのである。「横超」という、絶対他力の仏道を、「真宗」として人間業を超えた救いの仏道として親鸞は了解しているのである。

結章

グローバル化、経済成長という大義名分によって、自己中心主義を正当化し、自讃毀他の生き方が当たり前になった現代人。自讃毀他の魔で互いに傷つけあう限り、生きることには希望を見いだせない。しかし、このことに気が付けないところに、現代人の闇がある。

加害者は、かつては被害者だったかもしれない。また被害者は被害の体験が転じて加害者になってしまったかもしれないという、どちらの立場にもなりうるのが人間であると気づきあえた時、被害者も、加害者も、同時に救われる道が開けるのである。

阿闍世の廻心と韋提希念仏往生の姿に、親鸞は人間業を超えてすべての人は救われるという宗教的救済を見たのである。